

デーノタメ遺跡の発掘調査成果

北本市教育委員会 齊藤成元

□はじめに

デーノタメ遺跡は市域の南部、下石戸下地区に所在しています。付近は UR の公団住宅が林立している地区ですが、その一角に豊かな緑地が残されています。実はここがデーノタメ遺跡で、縄文時代中期から後期にかけての大規模な集落が眠っている場所です。

遺跡には時代の違う集落が、大きく分けて二つ存在しています。またこの集落の消長をつぶさに観察していくと、およそ 1,200 年にわたって人々の生活の場として機能していたこともわかってきました。加えて、湿潤な低湿地部分には良好な泥炭層が残されており、通常では消滅してしまう木材や種実などが多量に検出され、当時の食にかかわる事実も少しずつ明らかになってきています。

また、色違いの漆を重ね塗りして文様を描き出している土器群が多量に出土している点も注目されます。

これまで第 1 ～ 4 次にわたり行われた発掘調査や遺跡の性格を把握するための内容確認調査によって、新たな縄文時代像が垣間見える成果が上がっています。今回は、デーノタメ遺跡のこれら発掘調査について報告していきます。

遺跡の立地と環境

デーノタメ遺跡は江川支流の左岸に位置しています。立地は遺跡の名前に使

縄文時代中期	勝坂 3 式	約 5,000 年前
	加曾利 EⅠ式	
	加曾利 EⅡ式	
	加曾利 EⅢ式	約 4,500 年前
	加曾利 EⅣ式	
縄文時代後期	称名寺Ⅰ式	約 3,800 年前
	称名寺Ⅱ式	
	堀之内Ⅰ式	
	堀之内Ⅱ式	
	加曾利 BⅠ式	

デーノタメ遺跡の縄文時代編年表

われている「デーノタメ」と呼ばれた湧水起源によるため池を中心に、扇形に広がる台地上及びその低地に展開しています。

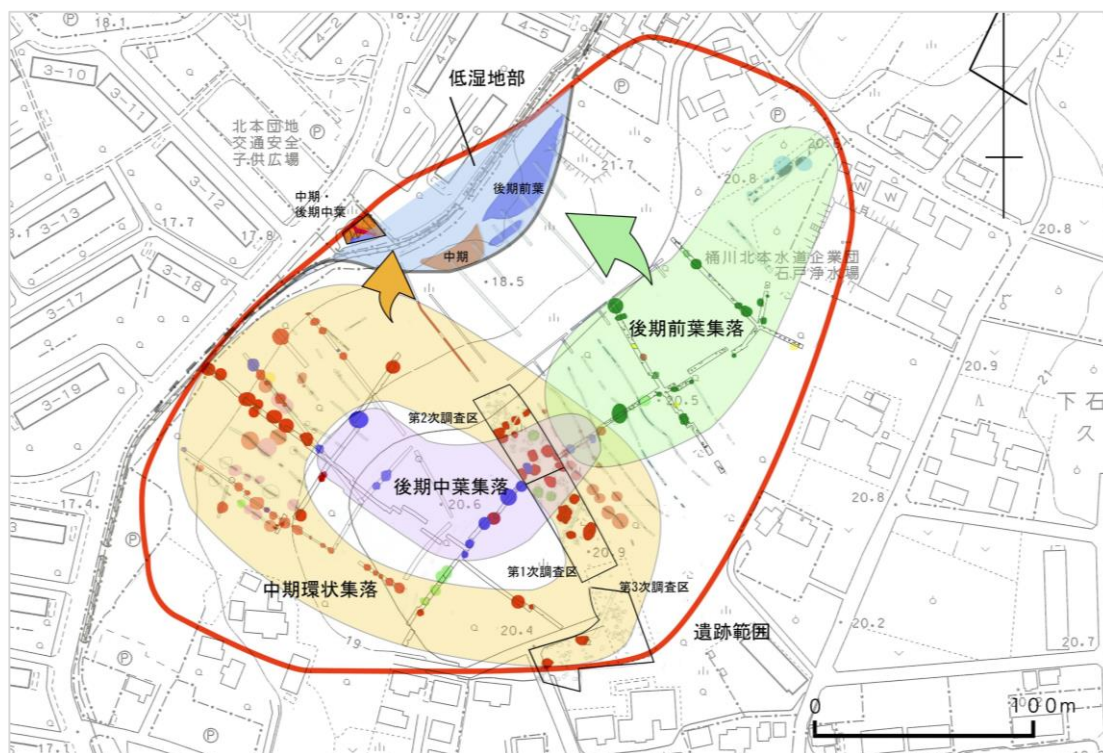
江川幹川は北本市域の北部を発して南流しています。河川は途中で樹枝状に分かれた支流を集めながら、南接する桶川市に入り上尾市樋詰付近で荒川に合流します。小河川ながらも流れに開析された谷津がよく発達しており、その谷筋には縄文時代の遺跡群が多く存在しています。

縄文時代中期の環状集落

縄文時代の住まいは竪穴式住居と呼ばれる半地下式の構造で造られています。今からおよそ 5,000 年前の住居は、平面が円形や楕円形を呈し、床面中央部に炉を設け、屋根を支える柱を設置するため柱穴を六角形に配しています。

集落は中央に広場を設け、そこを取り囲むようにドーナツ形に住居が配置されました。そのため、こうした形態を「環状集落」と呼びます。集落の中心広場にはお墓が造られたり、倉庫と思われるような建物が配されたりします。

デーノタメ遺跡ではこの環状集落がほぼ完全な形で残されていることが確認されています。その形状は大きな楕円形を呈しており、その規模は長径 210m、短径 140m を測ります。この規模は関東地方でも最大級の環状集落遺跡として



デーノタメ遺跡集落分布図

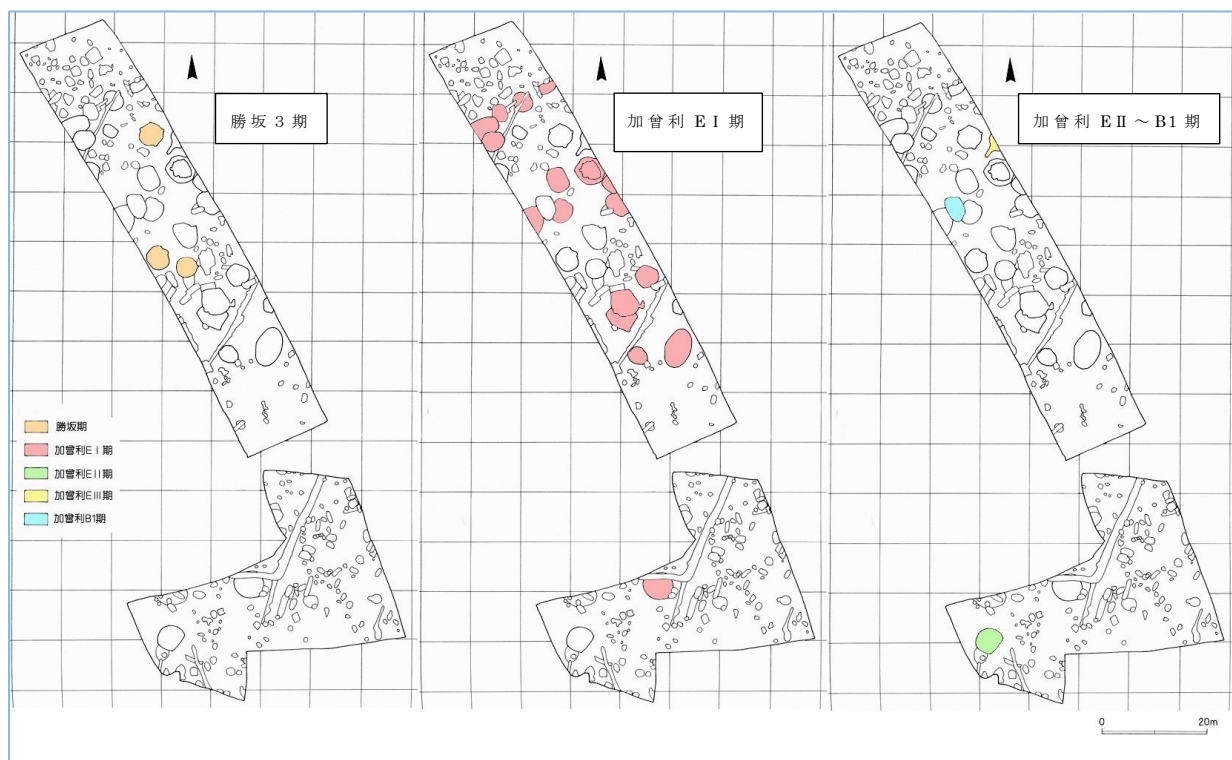
現在認識されています。この環状集落を構成する住居の数ですが、過去の発掘調査から推定して 200～300 軒程度で構成されていると考えられます。

さて、台地上で行った第 1～3 次調査においては、25 軒の住居跡が検出されています。これらは同時期に存在したものではなく、少しずつ時間を違えながら造られていました。調査では勝坂 3 期の住居跡が一番古く 3 軒が確認されています。次に加曾利 EⅠ期の住居跡が急激に数を増やし 20 軒が造られます。また加曾利 EⅡ期になると 1 軒、加曾利 EⅢ期では 1 軒と極端に数を減らして、一時期ですが縄文中期後葉には集落が縮小する傾向がうかがえます。

大型環状集落の密集地

デーノタメ遺跡が所在するエリアは江川の支流が造りだした谷筋に当たります。この江川上流域にはデーノタメ遺跡のほかに、縄文時代中期の大型集落が密集していることが近年知られるようになりました。

市境を越えて南接する桶川市域においては縄文時代中期の遺跡群が多く存在しています。そのなかでも江川左岸では高井遺跡においては大集落が展開していることが知られており、加曾利 EⅡ期を主体とした住居群が現在まで 100



第 1 次～3 次調査で検出された住居跡の時期別分布状態



江川上流域の大規模環状集落分布

軒以上調査されています。また、右岸においては、諏訪野遺跡の調査において概ね勝坂 3 期から加曾利 E I 期を主体とする、推定で長径 180m の馬蹄形を呈する環状集落の存在が明らかにされています。北本市のデーノタメ遺跡と合わせて、約 2 km 圏内の近距離で隣接するこれらの中期の大集落は、いずれもこの地域の基幹集落と考えられます。

遺跡はそれぞれが互いに影響しあいながら同時期に存在していたと思われる、この集落間での交流や資源分配などを考えるうえで、注目されるエリアといえます。

縄文時代後期の集落

後期の集落は中期集落が途絶えたのち、規模が大きくなって出現します。その位置は遺跡エリアの北東部から、台地を湾入する低地部に沿いながら広がります。

時期は堀之内 I・II 期と加曾利 B1 期にかかる遺構が主体となっています。住居跡などの遺構群は低地部に接する北向き斜面地で分布が密であり、台地の平坦部に至る地点で分布が途切れ、あまり内陸まで進出していません。集落は湾入する低地に並行する細長い帯状の形態となっています。

大まかな集落の変遷は、初めに堀之内期の集落が遺跡エリアの北東部から一部が中期集落に重なるように分布します。その後の加曾利 B I 期の集落は堀之内期の集落西端部から出現し、そのまま低地部を大きく回り込むように中期環状集落の広場部分へ進出する様相をみせています。後期の集落は北東部から南西部に向かって範囲を広げていったことがわかります。

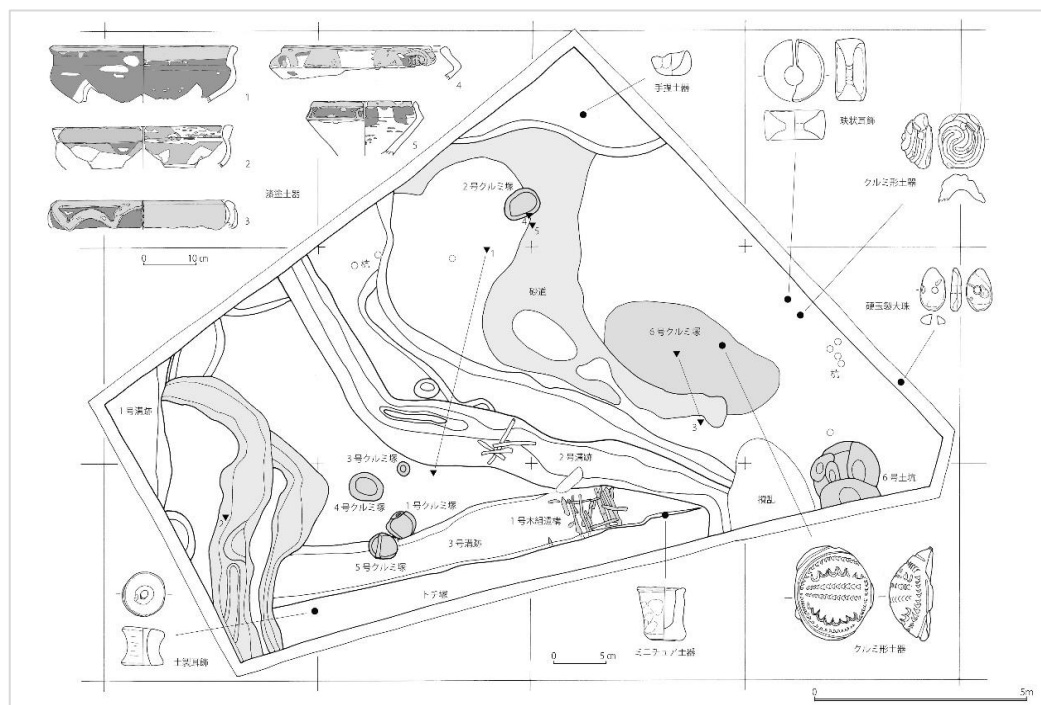
低地利用の様相

デーノタメ遺跡の特徴の一つが、台地上の集落と低地部の水辺が合わせて残

っていることにあります。台地直下を調査対象とした第4次調査においては、縄文時代中期及び後期の良好な泥炭層が残されており、各層位から多数の遺物群が検出されています。注目は土器・石器類のほか、木製品やオニグルミ・トチノキを始めとする植物遺体が検出されることです。

中期の遺構はクルミ塚、砂道跡、土器集中遺構が確認されています。クルミ塚は6基あり、1～4号クルミ塚は径65cm～90cmの規模で皿状に、5号クルミ塚は径70cm、深さ40cmの円筒状に掘りくぼめ、いずれも植物遺体などを意図的に廃棄した痕跡と考えられます。また、6号クルミ塚は2号溝跡の北側に径4.8m×2.5m、厚さ40cmの範囲で植物遺体を廃棄していました。オニグルミ以外ではキハダ・クワ属・ヒシ属等の種実を含み、このほかクルミ形土製品の出土が注目されます。付近では硬玉製大珠も検出されており、このエリアが廃棄の場であるとともに儀礼の場でもあった可能性を示唆しています。

後期の遺構は調査区南部の3号溝跡を中心に、木組遺構・6号土坑・トチ塚等があります。3号溝跡は幅1.1m、深さ0.2mの規模で東西にのび、その先端部には木組遺構が構築されていました。木組遺構は長さ130cm、幅95cmの規模で、径10cm前後の丸木や割材を敷き並べており、クリ・ウルシ・カエデ属・コナラ節等の部材で構成されていました。覆土中には割れたトチノキの果皮を多く含んでおり、種実の水さらしに関する遺構の可能性がありますが、また、3号



第4次調査区遺構配置と主な遺物

溝の覆土中には微細な種実類も豊富に含んでおり、土壌試料を水洗選別したところ、ニワトコ・コウゾ属・クワ属・マタタビ属などのベリー類がとくに多く検出される傾向にありました。



漆塗土器（浅鉢形土器口縁部片）

漆塗土器

出土遺物で注目されるのは多量の漆塗土器が出土したことです。塗彩に際しては黒漆を下地に塗り、赤漆でモチーフを描くものが多く見られます。これらは粘土を貼ったり削ったりして描かれる通常の縄文土器の文様とは違う意匠が多く見られ、興味深い点があります。

なお、漆塗土器の大半は加曾利 E I 式で、器種は浅鉢に限定される傾向にあります。

デーノタメ遺跡から見える縄文時代

デーノタメ遺跡は縄文時代中期および後期の大規模集落が良好に遺存するとともに、それぞれの時期の集落が利用していた水辺が残る稀有な遺跡といえます。また、縄文時代中期後葉から後期中葉にかけての基幹集落が、遺跡内に継続的に営まれていた点も高く評価できます。

加えて、現在多くの研究者の指導と協力を得て出土遺物とサンプル試料の分析を実施しています。その中で水洗選別による植物遺体の検出や大型種実の分析により、縄文時代中期から後期の植物資源利用の変化について明らかにされつつあります。また樹種、花粉分析からは当時の環境変化について言及することも可能であると考えています。さらに今後はデーノタメ遺跡を象徴する漆製品の分析を行うことで、縄文時代の漆芸技術の復元、ウルシ林などの資源管理の実態などに迫る可能性もはらんでいると考えます。

【参考文献】

磯野治司他 2017 『デーノタメ遺跡発掘調査概要報告書』北本市埋蔵文化財調査報告書
第 21 集 北本市教育委員会